

史料館報

第 59 号

平成5年9月

史料館の歩みと今後の課題

— 史料館長のあり方によせて —

史料館長

森 安彦

はじめに

私は本年八月一日付で、国文学研究資料館史料館長に任命されました。

史料館長は榎本宗次前館長が急逝されてから十一年目に補充されたこととなります。この間、史料館長の職務は国文学研究資料館長が史料館長事務取扱いとして兼任してきました。

小稿では、これまでの史料館長のあり方と史料館の歩みを整理し、今後の課題を考えてみたいと思います。

一 文部省史料館

(一) 兼任館長

史料館は一九五一（昭和二六）年

五月に設置され、同年五月三〇日の文部省令第一〇号の「史料館規程」に次のように明記されています。

(目的及び位置)

第一條 わが国の史料で主として近世のもの（以下「史料」という。）を収集し、保存し、及び利用に供し、併せて史料についての理解及び普及を図り、もってわが国における史学の研究に資するために、文部省大学学術局に史料館を置く。

2 史料館の位置（省略）

(館長)

第二條 史料館に館長を置く。

2 館長は、文部事務官又は文部教官をもってあてゐる。

3 館長は、文部省大学学術局長の命を受けて、館務を総理する。

目次

史料館の歩みと今後の課題——史料館長のあり方によせて——森 安彦(1)

史料保存についての雑感——馬淵 久夫(8)

史料管理研究室の新設について………(11)

複写サービスの開始について………(12)

………(12)

(第三條以下省略)

この「規程」により史料館は、文部省大学学術局学術課史料館として

出発し、一般には「文部省史料館」と呼ばれ、史料館長は学術課長の兼任でした。

(二) 専任館長

一五年目の一九六六（昭和四一）年二月に初めて専任館長として、当時初等中等局主任視学官小和田武紀氏が赴任しました。

翌六七年六月に史料館は文部省大学学術局情報図書課に所管換えとなりました。

さて、小和田館長時代に史料館は研究機関としての体裁を次第に整備されてきました。

六八（同四三）年に「史料館組織等に関する規定」が作成され、第一・第二・第三の史料室制と各室長が置かれました。また、この年「史料館研究紀要」創刊号が発刊され、今日に至っています。

行事の紹介………(7)

視察の紹介………(10)

受贈図書………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

………(13)

(三) 史料館長事務取扱

七二（同四七）年一月から四月末までは情報図書課課長古市正俊氏が史料館長事務取扱いを併任したのでした。

二 国文学研究資料館史料館

(一) 国文学研究資料館史料館への改組

一九七二（同四七）年五月一日に国文学研究資料館が発足し、文部省史料館は同館に改組編入され、国文学研究資料館史料館（独自で呼ぶときは「国立史料館」となりました（以下「史料館」）。

同年五月一日付の文部省令第二五

号の「国文学研究資料館組織運営規則」によると、「史料館」及び史料館長については次のように規定されています。

(内部組織)

第二條 研究資料館（国文学研究資料館のこと）に、次の三部を置く。

(省略)

2 前項に掲げるもののほか、研究資料館に、史料館を置く。

(史料館)

第五條 史料館においては、わが国の史料で主として近世のもの調査研究、収集、整理、保存及び閲覧を行う。

2 史料館に、長を置き、教授をもって充てる。

3 前項の長は、史料館の事務を掌理する。

4 史料館に、その所掌事務を分掌させるため、文部大臣が別に定めるところにより、室を置く。

5 室に、室長を置き、教授又は助教授をもって充てる。

6 室長は、上司の命を受け、室の事務を処理する。

(各部及び史料館の連携)

第六條 各部及び史料館においては、研究資料館の目的を効果的に達成するため相互に緊密に連携し、館

務の一体的処理にあたるものとする。

こうして、「史料館」は大学共同利用機関としての国文学研究資料館（以下「史料館」と対比してよぶ）きは「国文研」の一組織に編入されたのですが、「史料館」の目的・性格は、これまでの文部省史料館を継承したのでした。改善された事項は研究員の身分が文部事務官から文部教官となり、教授・助教授・助手等の身分が導入されました。

(一) 初代、史料館長

こうして、再出発した「史料館」館長には、前記の「組織運営規則」により教授をもって充てることとなり、鈴木寿教授が初代館長に就任したのでした。

鈴木寿氏は、小和田館長時代の一九六七（同四二）年七月一日付で、信州大学教授から文部省史料館に赴任され、史料館の研究体制の整備に尽力されてきたのでした。

鈴木館長は、七七（同五二）年四月一日付で定年退官されました。在職一〇年間のうち、後半の五年間を館長として活躍されたのでした。

鈴木館長時代には、情報閲覧室が新設され（七二年）、専任事務官二

名が配置され、閲覧、サービス部門が確立しました。新事業としては、七三（同四八）年近世史料目録調査費が計上され、「目録」収集が全国規模で計画的に開始され、今日も続けられています。また、七四（同四九）年より、各地の未調査の近世史料の所在調査が地元の研究者との共同で実施され、以後今日まで毎年二か所程度で行われています。

鈴木館長時代の大事業は、国文学研究資料館への改組により、それまで使用していた旧三井文庫を一部除いて取り壊し、新館の建設やそれにとまなう移転などのご苦労があったことでした。その概要については『史料館の歩み四十年』の年表にありますのでご参照下さい。

(二) 二代、史料館長

第二代史料館長は榎本宗次教授が一九七七（同五二）年四月一日に就任しました。

榎本氏は、鈴木氏と同時期である一九六七（同四二）年七月一日に山形大学教授から文部省史料館に着任されており、国文学研究資料館に改組された「史料館」では第二史料室長兼情報閲覧室長等を経験され、館長に就任されたのでした。

しかし、館長就任五年目の一九八二（同五七）年三月一日に急逝されました（享年五七歳）。

この榎本館長時代には、七八（同五三）年度より特別研究「近世史料の古文書学的研究」が開始され、重要古文書のマイクロフィルム収集やそれに関する研究会が組織され、それは現在に至るまで続行しています。

七九（同五四）年より地方史関係雑誌の収集に積極的に着手しました。八〇（同五五）年から史料館創設三〇周年の記念として、所蔵史料のうちで、特に利用の多い重要史料を『史料館叢書』として翻刻刊行を開始しました（東京大学出版会刊）。

第一期一〇冊、別巻二冊を現在まで刊行しましたが、『寛文朱印留』（上・下）『大塩平八郎一件書留』など、近世文書の、主としてまとまった関係史料を翻刻したものです。最近刊行した別巻一は『明治開化期の錦絵』（東京大学出版会刊）、別巻二は『江戸時代の紙幣』（同刊）です。現在は後述のように第二期『史料館叢書』の構成等を検討しています。

また八〇（昭和五五）年には、約一、〇五〇タイトル、二、一〇〇冊の目録概要を収録した、『史料館所蔵目録一覧』が発行され、八二年一

○月から「目録」類が、八三年四月から地方史（県・郡史）が閲覧公開されることとなりました。

さて、榎本館長逝去の前後には、「史料館」のあり方にとって重大な問題が発生していました。

すなわち、一九八一（同五六）年九月、行政管理庁が国文学研究資料館等の国立大学共同利用機関を行政監察し、その監察結果の勧告案を、翌八二（同五七）年三月に文部省に打診してきました。

同年六月一二日、行政管理庁による行政監察の結果、史料館は前年八一（同五六）年四月に新設された国立歴史民俗博物館（以下「歴博」）と事業内容の一部が類似（歴史資料の収集・保存とその研究）していると認められるので、類似の事業に係る両者の研究組織の在り方を検討すること、という「勧告」が出されました。すなわち「歴博」との統合を示唆されたのであります。これに対しては、文書館施設と博物館施設との相違や、史料館がこれまで果たしてきた役割に鑑み、慎重に対処するように求める要望書が、歴史学界や史料保存利用機関等から出されました。このような「史料館」の存立にかかわる局面に遭遇した時に、史料館

長は存在せず、国文学研究資料館長が史料館長事務取扱いを兼任したのでした。

四 「国文研」館長の「史料館」館長事務取扱い

一九八二（同五七）年三月一日に史料館長榎本宗次氏死去により、国文学研究資料館長市古貞次氏が史料館長事務取扱いを兼務しましたが、市古館長も同年四月一日には退官され、その後任となった小山弘志国文学研究資料館長が史料館長事務取扱いを兼任しました。以来一九九三（平成五）年三月末日の小山館長が退官されるまでの一年間、史料館長は補充されることなく、事務取扱い体制できたのでした。この間、館長のほか館内の各部長及び史料館長によって構成される部長会議には、史料館の代表もオブザーバーという立場で参加していました。

また、「行政勧告」や史料館長未補充という「史料館」の存在に危機感をもった歴史学界では、一九八三（昭和五八）年七月、日本歴史学協会の委員会の中に「国立史料館」問題特別委員会を設置しました。

さて、行政管理庁の勧告によって、「史料館」はその独自の存在意義を

問われることになりました。そのため「史料館」では、八三（同五八）年三月発行の『史料館報』第三八号に「史料館の役割と史料保存体制」と題する文章を発表して、今後の機能拡充構想を明示しました。そこでは、中心的に拡充すべき機能として、①全国の近世・近代史料の所在や地方史関係文献に関する情報を収集し、その閲覧サービスを行う機能、②近世・近代史料の史料学及び史料整理管理学に関する研究機能、③近世・近代史料の整理管理専門職（アーキビスト）養成のための研究・教育機能、の三つの柱を提示しました。以後、「史料館」の歩みは、この三つの柱の実現とその充実を目指してきたといえます。

①史料情報の集積とデータベースの作成

全国に散在する近世・近代史料はその全体像を把握することが困難なほど膨大な量である。「史料館」ではこれまで、これらの史料所在情報の収集に努力してきました。

そのため各地で刊行されている史料目録をできるかぎり収集し、収集した史料所在情報に基づき、史料所蔵者一件（史料群）ごとのデータベースを作成してきました。さらにデ

ータカードとして蓄積された史料所在情報をコンピュータを利用し体系的に整理し、広く研究者の利用に供することを目的としています。

一九八五（同六〇）年から今日まで文部省科学研究費補助金の交付を受けて、総合的・体系的に史料の所在情報の収集とデータベース化を推進しています。

すなわち、八五年から八七年までの三年間は「近世・近代史料所在情報の収集及びその体系化に関する基礎的研究」（総合A）を実施し、史料館教官と井上勝生、譽田宏、佐久間好雄、高沢裕一、松田之利、黒川直則、広田暢久、高橋啓、松下志朗、北原進、高山正也、所理喜夫、吉原健一郎の一三氏を研究分担者として、四五六機関を調査し、一、三六八タイトル、二、〇一〇冊の史料目録を収集しました。引き続き八八（同六三）年から八九（平成元）年までの二年間は「史料所在情報の蓄積検索システムに関する研究」（総合A）が実施され、史料所在情報に関するデータベースを作成し、同時に史料目録の補充調査を行い、七五機関について調査し、五九九タイトル、六六〇冊を収集したのでした。

そして、史料目録類の書誌データ

ベースと、史料所在データベースとを作成し、前者は二、四五五タイトル、五、〇六二冊、後者は二八、〇五二件の史料群の情報を入力しました。

八九（平成元）年四月、森安彦が代表となつて「文字記録史料と電算機応用に関する課題と解決」と題する研究集会を都内で開催し、研究機関・史料保存利用機関等の研究者・実務者が集まり、史料館からは上記のデータベースについて報告し、討議したのでした。

さらに引き続いて、九〇（平成二）年から九三（同五）年までの四年間は「史料所在情報の集約とその解析的研究」（一般研究A）により、データベースの機能拡充とデータの追加入力を実施しています。この研究では神戸商科大学情報処理教育センター助教の周防節雄氏に研究分担者として参加してもらっています。

九一（平成三）年二月には、史料保存利用機関及び歴史研究者を招いて第一回研究会を当館で開催し、上記研究課題についての要望・意見を聞き、ついで第二回研究会を九三（平成五）年二月二三日に実施し、これまでの成果と問題点について討議しました。

以上の史料目録類の書誌データベースの成果を、九二（平成四）年四月に史料館四〇周年記念出版『近世・近代史料目録総覧』（三省堂出版）として刊行しました。四、七〇〇タイトル、八、七〇〇冊の史料目録を収録したもので、本文は発刊所を基準に都道府県別に分け、書名索引と関係地索引とを付して利用の便を図りました。全国の史料目録を一覧できる「目録の目録」として、史料保存利用に活用されることが期待されます。また今後たえずデータを補充してゆくこととなります。

②研究機能の充実と成果の刊行
「史料館」では、科学的な史料保存利用体系の確立に資する目的として、主として二つの研究課題をもっています。

一つは「近世・近代史料に関する基礎的研究」、すなわち史料学を中心とした分野です。もう一つは、「史料の整理・保存・管理・利用に関する応用的・実践的研究」、すなわち史料管理学を中心とした分野です。

「史料館」では、これまでの長年にわたる実務を理論化し、集大成した成果として、一九八八（昭和六三）年に『史料の整理と管理』（岩波書店）を刊行しました。本書は第一部史料整理・管理の基礎知識、第二部史料の特質と目録編成から構成され、史料保存利用機関での史料の保存管理体系の確立をめざしたものと いえます。また館員の著書として、安澤秀一「史料館・文書館学への道」（吉川弘文館、一九八五年）、大藤修・安藤正人「史料保存と文書館学」（吉川弘文館、一九八六年）が刊行されました。このほか『史料館研究紀要』にも史料学・史料管理学に関する論文が多数収録されるようになりました。

③研修・教育機能の展開
「史料館」では一九五二（昭和二七）年から八七（同六二）年まで近世史料取扱講習会を実施し、受講生は二、〇〇〇人をこえました。しかし八〇年代になると、全国各地で地方自治体の文書館、大学資料館、企業資料館などの新設があいつぎ、近世文書にとどまらず、近現代の公文書を含め、記録史料全般の整理・保存・利用に関する幅広い専門的知識と技法の必要が高まってきました。

また八七（同六二）年の「公文書館法」の制定により文書館・公文書館等における専門職員（アーキビスト）の養成も急務となってきました。

「史料館」では、このような社会状況に対応して、八八（同六三）年から従来の近世史料取扱講習会を改組・拡充し、四週間規模の史料管理学研修会を発足させました。

八九（平成元）年度には、長期研修は八週間、短期研修は二週間とし、定員各三五名で、長期研修は七月と九月、短期研修は一月にそれぞれ実施しています。会場は長期研修は国文学研究資料館とし、短期研修は東京以外の会場で、八九（同元）年度は福岡市、九〇（同二）年度は岡山市、九一（同三）年度は札幌市、九二（同四）年度は徳島市、九三（同五）年度は京都市と各地で開催し、受講生への便も配慮しながら、史料管理学の普及に努めています。

カリキュラムは、受講生の討論会での意見や、館外講師の研修会検討会での意見、及び館内での検討等により修正を加え、毎年改めています。基本的には、文書館・史料管理学総論、史料論、記録・史料管理学、史料管理の実務等を柱としています。受講修了者にはレポート提出を義務付けて、審査の結果、合格者には修了証書を授与しています。九二（平成四）年までの四年間で、長期課程修了者は六三名、短期研修課程

修了者は九〇名で合計一五三名です。その内訳は史料保存機関が五二名、自治体史編集が三四名、大学史や資料室などが一七名、図書館勤務者が二九名、企業史編集関係や研究所が五名、大学院生が一四名、ほか二名となっています。

以上、「史料館」は、専任館長が未補充のまま、国文学研究資料館長が史料館長事務取扱いを兼務していたこの十年余に、史料館機能を充実発展させてきたのでした。その槓杆になったのが、「行政勧告」による存立の危機意識であったといえるでしょう。

一九九一（平成三）年度は史料館発足四〇周年にあたりました。同年一月七日に四〇周年記念祝賀会を開催し、多くの方々のご参加を得て盛大裡に終わることができました。

四〇周年記念出版として、『史料館の歩み四十年』と『近世・近代史料目録総覧』（三省堂出版）を刊行することができました。

この四〇周年を前後として、「史料館」の陣容が大幅に入れ替わりました。文部省史料館以来の第一世代の館員がつぎつぎと定年で退官されました。一九九〇（平成二）年三月には原島陽一・安澤秀一の両教授が、

九一（同三）年三月には、浅井潤子教授が、九三（同五）年三月には鶴岡実枝子教授が退官され、文部省史料館以来の館員は皆無となり、「史料館」は完全に世代交代したのでした。

（五）史料館長の発令

一九九三（平成五）年四月一日から国文学研究資料館長に佐竹昭廣氏が就任されました。

佐竹館長により、同年八月一日付で史料館長が、補充されたのでした。一年ぶりの史料館長の復活は、館員はもとより、「史料館」に心をよせて下さる多くの方々から悲願の実現として喜んでいただきました。それだけに、非力な私にとっては責任の重いものですが、やり甲斐のある仕事であり、微力を尽くしたいと念じております。

今年は私が信州大学から史料館に着任して九年目入り、一九九八（平成一〇）年三月の定年まで四年余しかありませんが、二〇〇〇（平成一二）年以降の移転をひかえ、この数年も「史料館」にとつては将来の発展の基礎づくりとなる重要な時期といえます。この時期に史料館長の重責を負うことになったことを深く認

識し、館員の総力を結集して努力したいと思っています。皆様のご指導・ご支援を心からお願いする次第です。つきに本年度からの新しい動向と課題について若干述べてみたいと存じます。

三 新動向と今後の課題

（一）史料管理研究室の新設

一九九三（平成五）年四月から「史料館」に史料管理研究室が新設されました。これまで実現できなかった組織の拡充であり画期的なことであります。

史料管理研究室設置の目的は、史料管理学という新しい分野の学問を研究深化させ、その体系化を図ることであり、それとともに、現在「史料館」が実施している史料管理学研修会を充実発展させることです。

史料管理学は、人類が生み出した膨大な記録情報のうち、歴史的文化的な価値のあるものを文化遺産として収集し、保存し、活用するために様々な分野の知識や技術を結集し、体系化する学問といえるでしょう。この史料管理学が文書館・公文書館活動の学問的基盤となるものです。

史料管理学の内容は少なくとも次

の四分野にわたります。すなわち、

①「史料学」「歴史学」の分野で、文書・記録に書かれた文字の解説・解釈、記録された社会背景・構造を究明しなくてはなりません。「史料学」の関連分野として、古文書学、書誌学、史料批判学、史料機能論、「歴史学」の関連分野としては、政治史、経済史、法制史、行政史、技術史、口述史学などです。

②「史料保存学」の分野で、史料を劣化・損傷から保護し、修復する理論と技術を科学的に探求します。関連分野として、保存環境科学、記録媒体科学、修復技術論などが必要となります。

③「史料情報学」の分野で、どのような文書・記録が存在し、その情報化・組織化をどのように構築するかを研究します。関連分野として、情報蓄積検索論、情報管理組織論、情報システム論などがあります。

④「組織管理論」の分野で、組織や団体の生成と組織機構、そこがどのような文書・記録を作成するかを解明します。関連分野としては、組織管理学、記録管理学、組織経営論などです。

このように、史料管理学は幅広い学問分野に跨がるものであり、日本

近世史・近代史の研究者中心の「史料館」の教官だけでは、史料管理学に必要な各専門分野の研究を十分にカバーすることができません。そこで、外部のそれぞれの分野の専門研究者を客員教授、客員助教授として一年ないし二年間程度で招聘し、「史料館」の教官と共同に研究を行い、個別専門分野の研究を史料管理学という枠組みの中に位置づけて史料管理学の体系化を目指すとしています。

この四月からは、馬淵久夫氏を客員教授として迎えました。馬淵氏は現在作陽短期大学教授（短大部長）ですが、その前任は東京国立文化財研究所保存科学部長で、「史料保存環境論」をテーマに史料館員との共同研究を進めております。

本年度の史料管理学研修会では「史料保存をめぐる国際状況」を講義していただいた。本誌にも「史料保存の雑感」が掲載されております。この客員部門の史料管理研究室を充実させ、将来的には「講座（教授・助教授・助手・事務官）」として定員化し、大学院教育を担当し、修士課程では、アーキビストの養成を、博士課程では、史料管理学という学問の専門研究者の育成をめざすことを

課題としたいと展望しています。

(二) 「史料所在データベース」作成の実現化

本年度から向う八年間の予定で、「史料所在データベース」の文部省科学研究費補助金が交付されることとなりました。

この「史料所在データベース」は主として、日本近世・近代の記録史料の所在と各史料群の内容についての情報をデータベースとして作成するものです。わが国では近世以降の文書・記録類が大量に伝存しており、それらの所在調査と整理・目録作成作業が急速に進展しています。しかし、どこにどのような史料が存在しているのか、所在と内容に関する情報の集約作業はまだ実施されていません。そこで、各史料群ごとに、所在地、所蔵者（機関）、職業、出所、旧地名、旧支配、旧階層・職業、年代、数量、内容、所蔵関係、保存状況、利用状況、出典、出典請求記号、調査年月日、調査者等についてのデータベースを作成し、史料の保存と利用及び歴史研究の基礎的情報として検索に供し、史料情報学におけるコンピュータ利用の基礎を構築しようとするものです。

現在、「史料館」が収集済みのデータの総件数は約七万件に及び、そのうち約二万件は入力済みです。

本年度からの科研「史料所在情報データベース」は、この残り五万件を八年計画で入力を完了させることを目標としています。

これらの成果にたつて、将来「史料所蔵者別全国一覧」を発行し、日本全国の近世・近代史料の全体像が把握できるように努めたいと計画しています。

しかし、史料館における史料情報機能は、今日まで、もっぱら文部省科学研究費補助金の交付を受けて、発展させてきました。それ故、業務として史料情報機能を支える組織をもっていません。このままでは館員の過重な負担となつてゆくことは火を見ることより明らかです。

近い将来、ぜひ「国文研」の研究情報部に相当するような組織が「史料館」にも整備されることが必要であります。「史料館」の史料情報機能を一層安定的に発展させるための不可欠の課題とえます。

(三) 複写サービスの開始

「史料館」では、本年四月一日から複写サービスを種々の制限つきで

が開始しました。

史料については、マイクロフィルム撮影によって収集し、紙焼ができていないものについては、紙焼からの複写を実施します。

まだ紙焼ができていない所蔵史料については、これまでどおり原史料の写真撮影をしていただいています。いずれ所蔵史料についてもマイクロ化をすすめ、リーダープリンター、または紙焼から複写できるように計画中です。

また所蔵図書で既に閲覧に供している地方史誌類（県・郡史）と史料目録類についても複写サービスの対象となりますのでご利用下さい。

来年四月以降は、市区町村史誌類、地方史誌全体の閲覧公開ができるよう現在準備をすすめています。

その時には、これらも複写サービスの対象となることはいまでもありません。なお詳細については本誌掲載の「複写サービス」の項を参照してください。

(四) 大学院生を対象としたセミナーの実施

本年八月二三日から二六日までの四日間、大学院生を対象とした「夏季原典講読セミナー」が実施されま

した。これは、佐竹館長の指揮のもとで「国文研」三名の部長と史料館長が講義を担当しました。

その概要については下記掲載の「夏期原典講読セミナーの開催」をご参照ください。

(五) 今後の出版計画

「史料館」では、毎年、『館蔵史料目録』（二冊）、『史料館研究紀要』（二冊）、『史料館報』（二回）『史料館叢書』（一冊）を刊行しています。が、このほか現在準備をすすめている新企画の出版計画は次のとおりです。

- ① 『館蔵地方史誌文献目録』
- ② 『館蔵史料要覧』
- ③ 第二期『史料館叢書』
- ④ 『史料学・史料管理学講座』
- ⑤ 『史料所蔵者別全国一覧』
- ⑥ 『地方史文獻年鑑』

しかし、これらはいずれも「史料館」業務の蓄積とその研究成果として結実するもので、長期計画の中で実現してゆきたいと考えています。

なお、今年の「夏季講読原典セミナー」の講義内容が、「原典セミナー・シリーズ」として、平凡社から来年三月以降に、本年度分四冊が刊行される予定です。

(六) 業務の見直しと再編成

一九九一（平成三）年秋の「史料館」創立四〇周年の記念の祝賀会を一つの節目として、「史料館」は、これまでの業務を全面的に見直し、業務の再編成と将来への展望を明確にする作業に取り組んでいます。すなわち、「業務見直し委員会」を発足させ、各業務ごとに現状の問題点と改善案を対比させ検討し、とくに改善案では、A 早急に実施可能、B 立川市移転以降に実現可能、C やや遠い将来に実現を計る、などの三段階に分けて、報告書（案）を作成し、検討を続けています。

これらの検討により実現すべき課題を概算要求項目として提出し、関係部署の理解と協力を得て、少しずつではありますが実現化に向かっていきます。本年四月以降の新しい事業はこれの成果ともいえます。

おわりに

最後に、史料館長としての課題について述べてみたいと思います。

「史料館」の四〇余年の歩みは、歴史学界や史料保存利用機関との提携・支援によって、「史料館」の機能を拡充してきました。これから

一層緊密な関係を大切にしてゆきたいと思っています。

「史料館」の業務は、地道な日々の努力の集積ですが、それは教官・事務官・事務補佐員・アルバイトの方々といろいろな立場で推進されています。これらの方々の意志の疎通を大事にし、連帯感がもてるようにしたいと思っています。

また、佐竹館長のいわれるように研究部門としての「国文研」「史料館」と事務部門としての管理部の三位一体によって、館全体の発展をはかり、とくに、国文学と歴史学との学際的分野を開拓し、この機関の特色を発揮し、ここならではの研究体制の樹立に尽力したいと思っています。

さらに現代は国際社会の時代であり、とくに史料管理学の分野では国際交流を深め、また諸外国に存在している近世・近代史料の収集と諸外国への提供にも積極的に取り組みたいと思います。

以上の諸点を史料館長の自らの課題とし、館員との協力のもとで、着実に、あせらず実現化の道を歩んでゆきたいと念じています。

〈参考文献〉『史料館の歩み 四十年』（一九九一年）、『国文学研究資料館の20年』（一九九二年）

行事の紹介

○夏期原典講読セミナーの開催○
国文学研究資料館では、今年度新たに、大学院生を対象にした夏期原典講読セミナーを、八月二三日・二六日の四日間開催した。

このセミナーは、大学共同利用機関としての活動の一環として、また日頃オリジナルの史料に身近に接することが少ない方に、その原典に触れ、読み、そして原典ならではの価値を再発見する機会を得ていただくことを目的として開催した。今回、九大学から一〇人が受講した。なお、今年度は準備期間の関係から関東近辺の大学院を対象としたが、今後はその範囲を広げる予定である。

内容は、A 松野陽一 文献資料部長―『千載集』前後、B 本田康雄 整理閲覧部長―『浮世風呂』『浮世床』を読む、C 森安彦 史料館長―近世村人の一生、D 新井榮蔵 研究情報部長―国文学と書道、と題して行った。

森史料館長は、近世村人の一生と題し、人の一生に関する誕生から死までのライフサイクルと古文書を照らし合わせて、子供から若者へ、結婚と離婚、老いと相続、の時期に分け、古文書を読み進めながら近世庶民の生きた姿を検証する内容を講義した。

科学技術の功罪

史料の保存を考えるとき、誰でも頭に浮かべるのは、まず温度・湿度・虫・黴に注意することであり、家庭で衣類を保存するときの気配りと大差はない。事実、現存する史料の多くが長い間、科学とは縁のないごく普通の環境に置かれて保存されてきたことは間違いない。しかし最近では、酸性紙だの紙の光劣化だのと科学用語が飛び交い、自然科学が乗り出さねばならぬ状況が生まれつつあるようである。

考えてみると、このような最近の問題は、人間の発明・発見の副産物であることが多い。十九世紀半ばのヨーロッパで、紙質改良のために加えられるようになったサイズ剤や充填剤が酸性紙の原因になることはよく知られている。十九世紀末に発見されたX線は、ものを透視するのにたいへん役立つが、使いすぎるとものに害を与えることが分ってきた。こういう事情は、昨今やかましく報道される二酸化炭素やフロンの問題と似ている。

十八世紀後半から芽を吹いた近代科学と、それを背景に展開した産業革命で、ヨーロッパ人の生活は他の地域の人々のそれに較べて格段に向



史料保存についての雑感

史料管理研究室 客員教授

馬淵 久夫

上した。そして、その生活文化は世界諸地域に拡散していった。しかし、そのマイナス面が百年、二百年経過した今日現われ始めた。近代科学発展の担い手であり歴史に残る大科学者であるラボアジエ、ドルトン、ケクレ、レントゲン、ベックレル、キ

ュリー夫妻などは、自分たちの研究が、人類の物質的繁栄にこれほどまでに寄与するとは思わなかっただろう。ましてや、マイナス面のことなど思いもよらなかったに違いない。マイナス面は二十世紀後半になって徐々に吹出してくる。それ以前に

は、科学者は新発見と発明に熱中し、発明・発見が後に及ぼす影響などには頭が廻らなかつた。強いて挙げれば、原子核分裂という一事象は例外かもしれない。

余談になるが、原子核分裂は第二次世界大戦勃発の直前にベルリンでハーンとシュトラスマンによって発見され、一九三九年一月六日付論文で発表された。このニュースは直ちに世界を駆けめぐったが、ニールス・ボーア（デンマークの原子物理学者）やエンリコ・フェルミ（イタリアの核物理学者）らは、この発見が人類の第二のエネルギー源につながると同時に、人類の命運を支配する爆弾にも応用されうることを直ちに考えていた。ボーアはのちにヨーロッパを逃れて米国の滞在したが、英国と米国が開発を始めた核兵器については、「世界の安全を脅かす恐れのあるものはすべて公開すべきである」との信念を、チャーチル首相やルーズベルト大統領と会談して訴えたという。

悩める保存科学者

あまり目立たないが、保存科学の分野でもやはり進歩と裏腹のマイナス面が近頃とりざたされている。合

成樹脂の使用とか、殺虫・防黴のための薬品による燻蒸などがその例である。前者は文化財修復技術の目玉商品であるが、史料保存にはあまり使われないのでここではさておいて、後者の燻蒸に目を向けてみよう。

史料館報の第三六号（昭和五七年三月）に、岩崎友吉氏が「史料と保存科学―防殺虫をめぐる―」という記事を寄せられている。また、二年後の第四十号には江本義理氏が「歴史史料の保存科学」という文を寄稿されている。両氏は、ともに化学畑の出身で、生え抜きの保存科学者であり、日本のバイオニアであったが、残念ながらここ数年の間に相前後して故人になられた。筆者は、生え抜きとバイオニアという言葉を除くと、お二人と同じ道を歩むものなので、それぞれの論説を注意深く読んでみた。

まず、岩崎氏の論は、副題の防殺虫が中心だが、氏の人柄を知らない方が読むと珍奇な説と思うだろう。鯨やイルカならいざ知らず、虫を殺してはいけない、虫と史料と人は生活圏を別にして共存しなければいけない、というのだから腰を抜かす人もいられるかもしれない。真面目に虫退治を考えている人は失望するだろう。

これは氏の言う人生哲学・宇宙哲学から出る発想で、生物への畏敬の念が根底にある。氏は若き日にフランスで学び、博學で、この論説でも多数の譬と小話を盛り込んで論じているが、根底には科学の枠を越えて東洋の思想が流れているようである。

岩崎氏は後半で技術論を展開する。殺虫剤も防虫剤も人間に対して毒だから使わない方がよいという論で、社会的に論議されている放射能や多くの薬品・染料・溶剤などと揆を一にする。これは論説が書かれて十年後の現在、文化財の燻蒸で真剣に考える必要に迫られているので、薬品による燻蒸全盛の当時、言いにくいことを言った岩崎氏の勇氣は評価されるべきである。

全体から見ると、岩崎氏は虫の問題に関しては科学無用論を唱えており、論題も「史料の保存科学」とせず、「史料と保存科学」と突き放した。この館報発刊当時の史料館の方々の反応はどうだったのだろうか。一方、江本氏の論説は、その濃厚で堅実な人柄通り、これを読めば保存科学の一通りの知識は得られるというものである。史料関係では、食害虫・微生物・酸性紙・照明・燻蒸法など、必要事項が網羅されている。

ところが、私見によると、江本氏が最も言いたいことは、論説三百余行の中で、おわりに、と題した最後の十二行にあるように思われる。

「……しかし、科学の力で積極的な予防対策を施した場合、安心して管理を怠るようなことになっては、むしろマイナスである。昔から文化財の取扱いの心得に、目通し、風通し、な言葉が語り伝えられている。自身自身の目で確かめて管理を行う心構えこそ、科学的な態度といえよう」

西欧流の保存技術（大部分は欧米で開発された）だけではだめだという点で、岩崎氏と一脈相通ずるところがある。

望まれるアイデア

同じ保存といっても、食品については、γ線殺菌・真空パック・冷蔵・冷凍など、科学技術を駆使した方法がまかり通っているのに、わが国の文化財の分野ではなぜこのように科学不信のムードが漂っているのだろうか。

多分つぎのような理由によるのだろう。食品では、本物を使って研究ができるし、考慮すべき保存期間が短く、少々微視的に損傷ができても構わない。研究成果は直ちに実行し、

具合の悪いところを改めればよい。

これらの条件が許されない文化財の保存は、難しい状況の中にあるといつていいだろう。また、食品は商品としての損得が絡むから、研究に対する力の入れかたも違ってくる。

保存科学者よ、無能を棚上げにして言い訳するのは見苦しいぞ、と叱責を受けそうだが、みんな防虫・殺虫・防黴に画期的な方法はないかと一生懸命考えているのである。

『エチレンオキサイドや臭化メチルなど、過去に開発された殺虫剤は、材質を痛めるか、人間の健康障害を起すか、発癌性かで、使用が困難になりつつある。人工的な物質は一見よさそうに見えても、いつ有害の判定が出るかわからないという危険を孕んでいるので、消去法によって残るのは自然界のあるがままの環境の中で工夫することである』

これは現在の保存科学者の標準的な思考だと思いが、ここから先が問題である。創造的なアイデアが必要である。

いま、専門家の間でテストされている殺虫法に『不活性大気燻蒸法』（Inert Atmosphere Fumigation）というのがある。これは、いわば酸欠法で、別に燻したり蒸したりする

わけではないが、従来法に倣って英語でそう呼んでいる。大気の主成分である窒素を九十九%にして三十%で数週間放置する実験が行われて、

イガ・シバンムシ・カツオブシムシ・キクイムシなどが卵を含めて死滅するという結果が得られている。時間がかかること、建造物のようなものには実施困難というように、文化財の種類が限られることに問題があるが、アイデアの一つである。

すこし昔、巷に広がった味の素の有名な話がある。

売上を上げるためのアイデアを社内公募したところ、一人の女子社員が振りかけるビンの穴を大きくすればよいと申し出た。実施したところ、売上は倍増した。

当の会社によると、穴を大きくし売上が向上したのは確かだが、女子社員云々は事実ではないとのことである。しかし、いかにもありそうな話であり、だから広がったのだろう。

最近、台所のごきぶり退治に、置いておくだけでいなくなるという便利な仕掛けが出回っている。聞くところによると、ごきぶりを惹きつけるものが入っていて、舐めると暫くして死に至るといふ。岩崎氏が聞いたら立腹されるに違いない代物だが、

凡人には有難い発明である。

史料の保存でも、このような話題が欲しい。科学以前のアイデアはどこからでも、誰からでも、生まれる可能性はある。史料を利用して皆さん、考えて頂けませんか。

馬淵久夫客員教授の紹介

一九三〇年東京都生まれ。理学博士。東京大学理学部助教授、東京国立文化財研究所保存部長を経て、現在同研究所名誉研究員、作陽短期大学教授であり、四月より史料管理研究室客員教授兼任となる。専攻は、同位体宇宙地球化学、考古科学、保存科学。主著は、『新実験科学講座・核放射線Ⅰ、Ⅱ』（丸善、編集責任者）、『考古学のための化学Ⅰ〇章』『続考古学のための化学Ⅰ〇章』（東大出版会、編著）。

世界の保存科学界の第一線で活躍の馬淵教授を招聘できたことにより、急速な進展をみせている保存科学の研究成果を得られる意義は大である。海外のアーカイブズの保存専門家との国際的な研究交流を積極的推進していく道を切り開き、史料管理学の確立に貢献できれば、と先生は語られている。

視察の紹介



電子計算機室、そして史料館の閲覧室と所蔵史料を視察した。

史料館の閲覧室において、森教授・山田助教授より収蔵史料の概要について説明を受けた。

当館の史料から数点を展示したが、その中でも幕府より津軽家に発給した「寛文四年、朱印状」と「安政二年、判物」（弘前津軽家文書）について、文書の様式の変遷やその機能に関しての説明を熱心に聞かれた。

また、彩色史料の内、和歌山県太地や長崎県五島の捕鯨の様子が描かれている「鯨絵巻」、世界的にみても最初の太平洋魚類の図鑑といわれる「モルッカ諸島魚類彩色図譜」（祭魚洞文庫旧蔵史料）などにも興味をもたれ、保存や利用に際しての当館の対応などについて関心を示された。

また、文部省の雨宮大臣官房審議官（学術情報企画官）が、本年九月十日、上田学術情報企画官とともに国文学研究資料館を訪れた。館長室で館の概要や課題などについて説明を受けた後、展示室・閲覧室・電子計算機室や史料館などを熱心に視察した。

本年五月一九日、森山文部大臣が国文学研究資料館を訪れた。文相は、佐竹国文学研究資料館長より資料館の概要や課題などについて説明を受け、その後、佐竹館長、六車管理部長の案内で、館内の展示室、閲覧室、

「上記写真 左より森教授（現史料館長）、森山文部大臣、佐竹国文学研究資料館長」

史料管理研究室の新設について

史料館では、平成五年四月より「史料管理研究室」を新たに設置した。設置の趣旨、研究室の概要、史料管理学研修会との関連について紹介したい。

歴史資料として重要な古文書はもちろん、日々厩大に生み出される行政公文書や企業資料をはじめとする記録史料を、歴史的文化的価値ある遺産として後世に伝えていかなければならない。これらの記録史料を永く保存し利用していくためには、さまざまな分野の知識や技術を科合して、新たな史料保存管理、利用のための学問体系を構築する必要がある。その学問こそが史料管理学である。

昭和六二年に公文書法が成立したことにより、文書館・公文書の重要性に対する認識は次第に高まり、文書館専門職員としてのアーキビストの養成を求める声も急速に強くなってきた。しかしながら、その専門職および文書館・公文書の学問的基礎である史料管理学は、わが国では従来なかった新しい学問であり、その研究も近年ようやく緒についたばかりである。

りである。

この史料管理学の理論・方法のもとに、文書館等において重要な記録史料について調査研究を行う専門職員（アーキビスト）が中心となって移管、収集、評価選別、整理、保存、提供などに応用・実践し、文書館運営の充実が図られなければならない。アーキビストの育成に資するため、学問分野として確立することが急務となっている。

この課題にこたえるため、「史料管理研究室」は、学問分野としての史料管理学を理論的に体系化し、確立させるとともに、その成果を史料管理学研修会、アーキビストの養成に生かすことを目的に設置された。

これまで史料館は、科学的な史料保存利用体系の確立に資する目的として、「近世・近代史料に関する基礎的研究」、すなわち史料学と、「史料の整理・保存・管理・利用に関する応用的・実践的研究」としての史料管理学を研究課題としてきた。だが、当館の教官だけでは史料管理学に必要な科合されるべき各専門分野

の研究は到底不可能である。そこで、史料管理研究室に外部の各分野の研究者や専門家を客員教官として招聘し、当館の教官と共同して研究を行い、個別専門分野の研究を史料管理学という学問の枠組みに位置付け、史料管理学の体系化を目指すこととした。

必要とする知識の範囲は広範囲にわたるが、史料管理学を体系化する上での分野を現在の時点で概括すれば、少なくとも次の①史料学・歴史学②保存科学③組織科学④情報科学の四分野にわたると考えている。これらの分野の候補者は、グローバルな各分野をカバーできるよう、国公立大学の他、文化財等研究機関、民間専門学校、企業など、広範囲を対象としている。

馴染み薄い室名のため、收藏史料の保存管理を担う部署との誤解が生じることが懸念されるが、設立の趣旨は以上である。

今年度は、隣接する諸科学の中から保存科学の専門家である馬淵久夫教授（作陽短期大学、8頁参照）を客員教授として招聘した。保存科学は文化財一般の保存を対象とするが、これをどのように史料管理学という学問の枠組みに位置付けるかの研究

を行っている。文書館は膨大な行政・経営記録の中から永久保存するものを選択し、適切で持続的な保存と利用を保証していかなければならず、扱う史料も紙以外の多様な記録媒体へと拡大している。その正しい管理には学問的な理論と方法が必要であり、保存科学の中での独自の知識と技能が要求される。まさに、史料管理学の体系の中で、保存科学をどう発展させるかの研究が求められているといえる。具体的には、文書館などで保存科学がどのように実践され、要望はどこにあるのかについて史料保存環境面から分析し、文書館運営実務への応用方法について研究を進めている。さらに、史料管理学研修会において史料管理研究室の研究成果を実践に移し、本年の研修会において「史料保存をめぐる国際状況」と題し、世界各国の文化財保存の現状と課題、史料保存科学の重要性ならび史料保存専門職の役割についての講義を担当した。

史料館としては、大学院レベルの本格的アーキビスト養成がわが国に一日も早く設置されることを望み、史料管理研究室を核とした史料管理学の学問的発展に努めていきたい。

（青木睦）

複写サービスの開始について

史料館では閲覧利用サービス向上の一環として、かねてより懸案であった複写サービスを、今年四月一日から開始することになりました。収蔵史料以外で閲覧に提供しているのは、マイクロ収集史料は紙焼を作成した時点、図書類については一九八二（昭和五七）年に史（資）料目録類、翌八三（同五八）年に地方史誌類の県・郡史に限って公開の対象としてきました。しかし、冊数の増加に比例して、これまで多くの利用者から複写サービスのご要望があり、実現に向けて検討を行ってきました。その主な問題点は、閲覧利用サービスに関連する施設及び人員の問題でしたが、特に施設については解決も難しく、複写作業の効率化を優先したために、閲覧室内にコーナーを設けて機器を配置せざるを得ず、騒音等で利用者の方々にご迷惑をおかけすることになってしまいました。早期に複写サービスを実現するための過渡的措置としてご了承をお願いいたします。

複写の対象は、閲覧提供している

図書類及びマイクロ収集史料の紙焼本です。まず図書類は①史（資）料目録類、②地方史誌類の県史・郡史、③閲覧室備付図書等で、著作権法の許容範囲内で行います。ただし和綴本や複写によって損傷の恐れのある図書、技術的に複写が困難なものについてはお断りする場合があります。①は史料館編で昨年度三省堂出版から刊行しました『近世、近代史料目録総覧』に収録された目録類（その後の追加を含む）であり、全国の史料所在情報の集約を目指し過去二〇年間にわたって収集されたものです。②については、史料館の収書体系の中核をなすものであり、現在は県・郡史に限定しておりますが、量的にはるかに多い市区町村史や史料集等の全面公開に向けて既に準備を開始しておりますので、今しばらくお待ち下さい。一方のマイクロ収集史料については紙焼本で閲覧提供している現状から、今回の複写サービスは、この紙焼本から行うこととしました。そのための準備として一九六七（昭和四二）年以降マイクロ収集した史

料の原本所蔵者に複写サービス開始の事前承諾を得る手続きを行いました。その結果、承諾の得られた史料に限って複写サービスを行っております。ちなみに七月末日現在、依頼総数九六件、承諾六七件、不承諾三件で、約七割の方々（機関）よりご承諾いただきました。また、諸般の事情でご承諾いただけなかったり、撮影させていただいた時点からかなりの年数が経過したために、所蔵者の変更や転居等の理由から、残念ながら回答を得られないものもありました。今後も未回答分についてはできるだけ追跡調査を行い、サービス向上に努める予定です。また「史料を利用して作成した論文など活字になった場合、寄贈することを求める」という条件を付される所蔵者（機関）もおられました。史料館では今回の複写サービス開始以前より、収蔵史料やマイクロ収集史料を利用した論文等について、その抜刷（含、コピー）等をご寄贈下さるようお願いしておりますが、今後は是非ご協力下さいますようお願いいたします。

ここに、これまでのマイクロ収集事業はいうまでもなく、今回のご回答にご協力いただきました関係各位

（機関）に厚くお礼を申し上げる次第です。

次に、複写方法は電子複写方式によるものとし、料金はA判B判を問わず一枚三十五円（国立大学付属図書館等共通料金表適用）となります。複写の申込（受付）は、直接来館の場合は閲覧室カウンター、遠方の場合は郵送による申込も可能です。直接来館されて複写を申し込まれる場合は、複写物は複写料金と引き替えに即日渡しを原則としますが、郵送による申し込みの場合、料金先払いなどの制約があり、時間がかかることが予測されます。また事務処理能力を越える大量の申し込みは、お断りする事もありますことを予めご承知置き下さるようお願いいたします。なお、史料館収蔵史料については、原本を閲覧に供しているため、従前通り史料保存対策上、電子式複写は認めておりません。したがって、今回の複写サービスの対象にはなりませんのでご注意ください。ただし、筆写の代用として閲覧者自身による写真撮影は認めておりますので、史料請求の際にお申し出下さい。

詳しい手続き等につきましては情報閲覧室にお問い合わせください。

（情報閲覧室）

受贈図書平成四年度(三)

福井県史 資料編16―下・7 (福井県)
伊予国宇和郡三浦田中家文書中間報告

(菅原憲二)

松浦武四郎「野帳」 午第五・六番(小
林和夫)

国泰寺歳時記(釧路市)

釧路の近世絵図集成(同右)

尾上町誌 通史編・資料編Ⅰ・Ⅱ (青
森県) 尾上町

仙台市指定有形文化財大年寄惣門解体修
復工事報告書(仙台市教育委員会)

大館の歴史(大館市教育委員会)

能代市史資料 第21号(能代市編さん室)

新庄市史 第二巻(新庄市)

新庄市史編集資料集 第16号(新庄市教
育委員会)

西会津町史 第4巻(下)・第6巻(上)
(下) (福島県) 西会津町史刊行委員
会

福島市史資料叢書第59・60輯(福島市教
育委員会)

寒河江市史編集叢書 第45集(寒河江市
教育委員会)

茨城県史料 中世編Ⅳ・近世政治編Ⅱ・
戦後改革編(茨城県立歴史館)

取手市史 通史編Ⅱ(取手市教育委員会)

岩井市史資料 近現代編Ⅰ(岩井市)
岩井市史調査報告書 岩井市の板碑(同
右)

三和町史 資料編近世(茨城県) 三和
町

そうわの古文書一(茨城県) 総和町教
育委員会

そうわの板碑(同右)
そうわの寺院 Ⅰ(同右)

いまいち市史 通史編別編Ⅱ(今市市役
所)

シリーズ・郷土小山の古墳を巡る(小
山市立博物館)

上野国郷帳集成(群馬県文化事業振興会)
所沢市史調査資料32・別集16(所沢市史
編さん室)

市史調査報告書 第九・十三・十四集
(戸田市)

春日部市史 第四巻(春日部市)

三郷市史 第三巻(三郷市)

岩槻市史資料 第十八巻(岩槻市教育委員
会)

草加市史調査報告書 第五集(草加市)

歴史の道調査報告書 第十五集(埼玉県
立歴史資料館)

埼玉の中世寺院跡(同右)

千葉縣史料 中世篇 諸家文書補遺(千
葉県文書館)

鎌ヶ谷市史 資料編Ⅲ下(鎌ヶ谷市)
鎌ヶ谷市郷土館調査報告書Ⅱ

君津市史 史料集Ⅱ(君津市)

市民のための「袖ヶ浦の歴史」(袖ヶ浦
市)

山武町史 社寺編(千葉県) 山武町

写真でみる船橋2(船橋市郷土博物館)

千葉県船橋市印内台遺跡―第4次調査報
告書―(船橋市教育委員会)

平成3年度船橋市市内遺跡発掘調査報告
書(同右)

小室上台遺跡(同右)
中央区年表 昭和時代十一(東京都中央
区立京橋図書館)

府中市郷土資料集 14(東京都府中市教
育委員会)

高尾山薬王院文書 第三巻(法政大学)
日野市史 通史編Ⅱ(下)

五十子敬斎日記 大正十三年・大正十四
年・大正十五年(日野市)

大田区史 中巻(大田区)

大田区の文化財 第28集(大田区教育委
員会)

桃谷(同右)

大田区の埋蔵文化財 第12集(同右)

大田区遺跡地図(同右)

写された大田区(大田区立郷土博物館)

東京市史稿 市街編第八十三・産業編第

三十六(東京都)

東京都古文書集 第10巻(東京都教育庁
文化課)

小花作助関係資料調査報告(同右)

東京の民俗 8(同右)

町田市小野路地区文化財調査報告書(上)
(同右)

山王三丁目遺跡一九九一(熊野神社遺跡
群調査団)

浅間神社古墳(東京急行電鉄)

葛飾区古文書史料集六(葛飾区郷土と天
文の博物館)

東京東郊農村の生産伝承Ⅱ(同右)

葛飾区郷土と天文の博物館考古学調査報
告書 第1・2集

八王子千人同心史 通史編・資料編Ⅰ・
Ⅱ(八王子市教育委員会)

郷土資料館シリーズ 第31号(同右)
小平市郷土資料索引 第2集(小平市中
央図書館)

武蔵野ショック(武蔵野市)

豊島区立郷土資料館調査報告書 第七・
八集(豊島区教育委員会)

豊島の石造文化財(Ⅰ)(同右)

豊島区地域地図 第5集(同右)

民権ブックス 5(町田市自由民権資料
館)

港区文化財調査集録 第1集(東京都港
区教育委員会)

世田谷区教育史 資料編5(世田谷区教

育委員会

田無市史 第二卷(田無市)

龍津寺東遺跡(昭島市教育委員会)

国分寺市文化財調査報告 第35集(国分寺市教育委員会)

稲城の昔ばなし(稲城市教育委員会)

荒川区の文化財(二)(東京都荒川区教育委員会)

須原家文書10(江戸川区教育委員会)

秦野市史 通史3(秦野市)

山ふところの民俗誌(同右)

伊勢原市史資料編大山資料編(伊勢原市)

伊勢原市史民俗調査報告書5(同右)

茅ヶ崎市史 現代5(茅ヶ崎市)

加能史料 鎌倉1(石川県)

都留市史 資料編古代・中世 近世1(都留市)

長野県史をふりかえる(長野県史をふりかえる発行人会)

各務原市資料調査報告書 第十五号(各務原市歴史民俗資料館)

静岡県史 資料編3・6・9・18(静岡県)

裾野市史 第一卷(裾野市)

細江町史 通史編下(静岡県 細江町)

小山町史 第四卷(静岡県 小山町)

図書館叢書2(浜松市立中央図書館)

沼津市歴史民俗資料館資料集10

韭山町の民具(静岡県 韭山町史刊行委員会)

刈谷市史 第6卷(刈谷市)

名古屋市博物館資料叢書二

瀬戸市近世文書集 第三集(瀬戸市)

(愛知県)三好町立歴史民俗資料館文化財調査報告No.4

小嶋家文書(三好町立歴史民俗資料館)

豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第14集(豊橋市教育委員会)

四日市市史 第六・十一卷(四日市市)

自然とのふれあい(尾鷲市立中央公民館)

精華町史 史料篇1・2(京都府 精華町)

福知山市史 第4卷(福知山市)

近世京都町共同体史料の総合的研究(吉田伸之)

長岡京特別後援会資料集(中山修一)

先生喜寿記念事業会

向日市埋蔵文化財調査報告書 第33・34集(向日市教育委員会)

宇治市文化財調査報告 第3冊(宇治市教育委員会)

貝塚の歴史と文化(貝塚市教育委員会)

大阪市史資料 第三十五輯(大阪市史編纂所)

朝日新聞記事集成 第十集(枚方市)

羽曳野市資料叢書5(羽曳野市)

大谷女子大学資料館報告書 第27冊

泉南市文化財調査報告書 第23集(泉南市教育委員会)

新修神戸市史 歴史編II(神戸市)

姫路市史 第三卷(姫路市)

(村岡藩資料館)資料1・3(兵庫県村岡町)

博物館普及資料 第10集(兵庫県立歴史博物館)

池田慶徳公御傳記 別巻(鳥取県立博物館)

奈良県大和郡若経調査報告書(奈良県教育委員会)

下関市史 資料編II(下関市)

ふるさと香川の歴史(香川県)

香川県歴史の道調査報告書 第七・八集(瀬戸内海歴史民俗資料館)

福岡大学総合研究所資料叢書 第七冊

佐賀県文化財調査報告書 第一〇〇・一〇五集(佐賀県教育委員会)

本渡市史(本渡市)

田野村竹田資料集 著述篇・詩文篇・書簡篇・絵画篇(大分県教育委員会)

高崎町史(宮崎県 高崎町)

嶺南日誌 第2巻(宮崎県立図書館)

宮崎県文化財調査報告書 第35集(宮崎県教育委員会)

平成3年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書(同右)

東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書(同右)

内野々遺跡(宮崎県教育委員会)

海蔵寺遺跡・榎屋敷遺跡(同右)

樺山・郡元地区遺跡(同右)

田代ヶ八重遺跡(同右)

穂北城跡(宮崎県教育委員会)

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第6・10集(えびの市教育委員会)

都濃町文化財調査報告書 第4集(宮崎県 都濃町教育委員会)

都城市文化財調査報告書 第14・15集(都城市教育委員会)

南日本文化研究所叢書 15・17(鹿児島短期大学付属南日本文化研究所)

奄美史料22(鹿児島県立図書館奄美分館)

具志川市史 第一卷(具志川市)

具志川市史編集資料1(具志川市教育委員会)

日本文化論叢(弘前大学文学部)

江原素六生誕百五十年記念誌(沼津市明治史料館)

上杉謙信(花ヶ前盛明)

明治四年以降 神宮職員年表(神宮文庫)

成田山新勝寺史料集 第三卷(大本山成田山新勝寺)

大日本史料 第一編補遺(別冊二)・第二編之二十四・第七編之二十六・第八編之三十五(東京大学史料編纂所)

大日本古文書 家わけ第十七大徳寺文書別集真珠庵文書之二・家わけ第十八東大寺文書之十五・家わけ第二十一蜷川家文書之四(同右)

大日本古記録 民経記六・後愚昧記四・二水記二・實躬卿記一(同右)

(以下次号)

平成5年度 史料管理学会 カリキュラム構成

長期研修課程

短期研修課程

長期研修課程				短期研修課程			
1. 総論				1. 総論			
(1) 文書館総論	史料館	森	安彦	(1) 文書館総論	史料館	森	安彦
(2) 史料管理学序論	史料館	安藤	正人	(2) 地域社会と文書館	京都府立総合資料館	黒川	直則
(3) 地域社会と文書館	藤沢市文書館	高野	修				
(4) 情報提供サービス	機関として図書館と文書館	蛭田	廣一				
	小平市立中央図書館	松田	武彦				
(5) 組織体と記録	産能大学	井出	嘉憲				
(6) 情報関連法	信州大学						
2. 史料論				2. 史料論			
(1) 史料論総論	史料館	丑木	幸男	(1) 近世史料論Ⅰ(総論・幕藩史料)	史料館	大友	一雄
(2) 古代中世史料論	東大史料編さん所	保立	道久	(2) 近世史料論Ⅱ(町方・村方史料)	史料館	渡辺	浩一
(3) 近世史料論Ⅰ(総論・幕藩史料)	史料館	渡辺	浩一	(3) 近現代史料論	史料館	丑木	幸男
(4) 近世史料論Ⅱ(町方史料)	史料館	渡辺	浩一				
(5) 近世史料論Ⅲ(村方史料)	史料館	渡辺	浩一				
(6) 近現代史料論Ⅰ(官公庁史料)	史料館	渡辺	浩一				
(7) 近現代史料論Ⅱ(民間史料)	史料館	渡辺	浩一				
3. 記録・史料管理論				3. 記録・史料管理論			
(1) 記録管理論	千代田化工建設	作山	宗久	(1) 史料所在調査法	史料館	渡辺	浩一
(2) 史料管理プログラムの設計	史料館	安藤	正人	(2) 近世史料の整理と検索手段の作成	史料館	安藤	正人
(3) 史料所在調査法	山田	哲好		(3) 近現代史料の整理と検索手段の作成	史料館	鈴木	英一
(4) 史料の収集と受入	栃木県立文書館	仲田	凱男	(4) 史料の利用と情報サービス	史料館	山田	哲好
(5) 現代行政文書の評価と移管	山口県文書館	戸島	昭				
(6) 近世史料の整理と検索手段の作成	史料館	安藤	正人				
(7) 近現代史料の整理と検索手段の作成	埼玉県立文書館	白田	勝美				
(8) 史料の利用と情報サービス	史料館	山田	哲好				
(9) コンピュータの利用	神戸商科大学	澤村	正信				
(10) マイクロ写真の利用	大阪ビジュアルコミュニケーション専門学校	後藤	公明				
(11) 海外所在史料の収集と利用	国立国会図書館	枝松	栄				
(12) 裁判記録の利用	弁護士	竹澤	哲夫				
4. 史料保存の理論と技術				4. 史料保存の理論と技術			
(1) 史料の保存と管理Ⅰ(総論・保存環境論)	茨城県立歴史館	高橋	実	(1) 史料の保存と管理	史料館	青木	睦
(2) 史料の保存と管理Ⅱ(保存手当ての実務)	史料館	青木	睦	(2) 史料の保存科学	東京芸術大学	稲葉	政満
(3) 史料の保存科学	東京国立文化財研究所	増田	勝彦	(3) 史料の修復と補修	宇佐美直秀	宇佐美直秀	宇佐美直秀
(4) 史料の修復と補修	宮内庁書庫部	横山	謙次				
(5) 写真史料の保存	千葉大学	荒井	宏子				
(6) 文化財保存施設の防災対策	都市防災研究所	小川	雄二郎				
(7) 史料保存をめぐる国際状況	作陽短期大学	馬淵	久夫				
5. 史料管理の実際				5. 史料管理の実際			
(1) 藤沢市文書館における史料管理	藤沢市文書館	高野	修	(1) 京都府立総合資料館における史料管理	京都府立総合資料館	黒川	直則
(2) 国立国会図書館における史料管理	国立国会図書館	松枝	栄				
(3) 国立公文書館における史料管理	国立公文書館	伊藤	賢逸				
(4) 埼玉県立文書館における史料管理	埼玉県立文書館	太田	富康				
(5) 東大史料編さん所における史料管理	東大史料編さん所	横山	伊徳				

彙報

○平成5年度史料管理学会(通算三九)の開催

本年度の研修会は、長期研修課程が、前期は平成五年七月五日・七月三〇日、後期は平成五年八月三十一日・九月二六日に、国文学研究資料館において開催された。引き続き、短期研修課程は、平成五年十一月八日・十一月九日、京都会場(京大会館)において開催される(受講者は決定済み)。長期・短期の研修内容およびカリキュラム編成は上記の通り。

○評議員会と運営協議会の開催

本年七月二〇日に評議員会が、六月一八日に運営協議会がそれぞれ開催され、管理運営の概況、平成四年度事業報告、平成五年度概算要求、史料館長ならびに教官人事、等の議事が評議ないし協議された。

○計報

評議員小田切進氏(日本近代文学館理事長、昨年二月二〇日)、評議員土田直鎮氏(国立歴史民俗博物館長、今年一月二四日)の両委員が御逝去されました。元評議員石井良助氏(昭和四七・五九年在任)は、今年一月二日御逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

○文部省科学研究費補助金の交付

・一般研究A「史料所在情報の集約とその解析的研究」(代表森安彦)に四年計画の最終年として、三〇〇万円が交付された。

・一般研究C「近代日本養蚕型地主の研究」(代表丑木幸男)に一三〇万円が交付された。

・一般研究C「民間所蔵史料の保存・管理に関する研究―山梨県大月市星野家文書を素材として―」(代表安藤正人)に一〇万円が交付された。

・研究成果公開促進費「史料所在データベース」(代表森安彦)に七九一万円が交付された。

○館内研究会

〔二二三回〕 平成四年十一月二四日

「信濃国松代真田家文書(その六)」の目録編成について 森 安彦

「尾張国知多郡半田村中禁平左衛門家」の目録編成について 大友 一雄

〔二二四回〕 平成四年十二月一七日

第二回国際文書館会議およびアメリカ記録史料科学者協会第五六回年次大会について 安藤 正人

〔二二五回〕 平成五年三月三〇日

複写サービスについて 情報閲覧室

〔二二六回〕 平成五年四月一五日

『史料館所蔵史料要覧(仮称)』について 要覧委員会

〔二二七回〕 平成五年五月二〇日

最近の歴史情報資源研究センター問題について 森 安彦

〔二二八回〕 平成五年六月八日

『史料館所蔵史料要覧(仮称)』データシートの問題点 要覧担当者

〔二二九回〕 平成五年六月一七日

平成五年度史料管理学研修会講義構想発表 丑木幸男・渡辺浩一・青木 睦

〔二三〇回〕 平成五年七月一日

「科学研究費による史料所在情報のデータベース化」について 山田 哲好

〔三三一回〕 平成五年七月二七日

紙の年代測定 客員教授 馬淵 久夫

〔三三二回〕 平成五年八月一九日

裁断史料復元におけるコンピュータ支援システムについて 神戸商科大学 中原 紀子、青木 睦

○史料管理学に関する研究交流

本年七月一九日、東京大学教育学部客員研究員として滞在中の中国人民大学檔案学院助教馮惠玲女士が来館されたのを機に、「中国におけるアーキビスト養成」と題してお話いただき、職員および史料管理学研修会研修者と研究交流を行った。

○人事異動

・館長の異動

国文学研究資料館長兼史料館長事務取扱 退職(平成五年三月三十一日限り)

小山 弘志

国文学研究資料館長兼史料館長事務取扱 新任(平成五年四月一日付)

佐竹 昭廣

免・史料館長事務取扱(平成五年七月三十一日限り)

佐竹 昭廣

史料館長(教授併任)(平成五年八月一日付)

森 安彦

・転出(平成五年四月一日付)

大藤 修

・転出(平成五年四月一日付)

渡邊 尚志

・新任(平成五年四月一日付)

教授・第二史料室長併任

鈴木 英一

助手 福田 千鶴

助手 青木(廣瀬) 睦

・昇任(平成五年四月一日付)

助教(助手より) 大友 一雄

・採用(平成五年四月一日付)

史料管理研究室 客員教授 馬淵 久夫

○海外研修

安藤正人が「アメリカ合衆国の史料保存機関における史料管理の理論と技法の調査研究」のため、平成五年七月三十一日～八月一四日の間、研修旅行。

○海外出張

安藤正人が「第五回アーキビスト養成

に関する国際シンポジウム」および「国際文書館評議会アーキビスト教育養成部会運営委員会」に出席のため、平成五年九月一四日～九月二二日の間、ギリシャ共和国に出張。

平成六年度史料管理学研修会(通算四〇回)の開催予定

長期研修課程

国文学研究資料館 東京会場

前期 六年七月四日～七月二九日

後期 六年八月二九日～九月二二日

短期研修課程

新潟県新潟市 会場未定
六年十一月七日～十一月一九日
(前・後期、短期とも最後の二週間はレポートの作成にあてる)

史料館報 第五九号
平成五年(一九九三)九月三〇日
編集兼 国文学研究資料館
発行者 史料館
〒一四 東京都中央区豊町一ノ二六ノ一〇
電話〇三(三七八五)七二一(代)
印刷所 東京都台東区寿三ノ一四ノ五
有限会社 スミダ
電話〇三(三八四二)七三三三